

戦前の男声合唱団・オリオンコール

増田 研・高見良太

1. はじめに

オリオンコールは昭和3年に結成され、昭和17年の活動記録を最後に姿を消したアマチュアの男声合唱団である。その活動期間は満州事変（1931年）から太平洋戦争にいたる十五年戦争とほぼ重なっており、活動内容もそうした時代背景の影響を受けているⁱ。

洋楽受容史において合唱を扱う先行研究は少ない。戸ノ下の一連の研究（戸ノ下2008、2010、戸ノ下・横山2011）や山口による研究（2005、2009）を除けば戦前の合唱をとりあげたものは少なく、とりわけアマチュアの活動についてはあまり明らかにされていない。

山口（2005）によれば日本における「合唱団」の歴史は西洋音楽の導入よりも遅れて始まった。明治32年（1899）に創立した関西学院グリークラブが日本の男声合唱団の嚆矢とされ、大正時代に入ると、多くの合唱団が結成されるようになる。日本初の職業的合唱団「東京混声合唱団」が結成されたのは1919年（大正8）であり（山口2005：29）大正11年（1922）には東京市教育課によってアマチュアの「東京市民合唱団」が結成されるなど、この時代には合唱活動の裾野が広がった。昭和2年（1927）日本で最初の合唱コンクールである「第一回合唱音楽祭」が開催された。このように大正時代から昭和初期にかけて、日本での合唱運動は高まりを見せたのである。オリオンコールが結成されたのはそうした時代のことである。

オリオンコールは、昭和3年に、吉田永靖を団長として結成されたアマチュアの男声合唱団である。社会人を中心として結成され、コンクールに限らず演奏会やレコードの吹き込み、ラジオへの出演など、幅広く活動していた。その活動は昭和17年の解散までの14年間にわたった。

本研究が依拠する資料は国立音楽大学および全日本合唱センター資料室に所蔵されている資料と、メンバーの一人だった高見三夫氏（宮崎県在住）が保管している一次資料である。高見氏は明治39年（1906）に長崎市で生まれ、昭和9年に東京高等音楽学院（現国立音楽大学）を卒業する頃からオリオンコールに参加していた。本稿で紹介する写真資料はすべて高見氏によって保管されていたものである。

2. 昭和3年から昭和9年まで

昭和3年（1928）10月に吉田永靖を団長として結成されたオリオンコールの、最初の合唱コンクールへの出場は昭和7年のことであるⁱⁱ。この時のメンバーは8人だった。堀内は結成時のメンバーの多くが「中年の知識階層だった」と述べている（堀内1948：249）。当時のメンバーの一

人である高見も「団長の吉田は耳鼻科の専門医で、メンバーにはサラリーマンが多かった」と述べているが、その後専門の音楽教育を受けた者を多く加入させるようになった。

オリオンコールの活動拠点は吉田の自宅で、毎週ここに集まって練習をしていた。のちにオリオンコールの指導に携わることになる音楽家として大和田愛羅、本居長豫、徳山蓮、橋本國彦、奥田良三、紙恭輔、矢田部頸吉、外山國彦、山田耕作、アウグスト・ユンケルなどの名前を挙げることができる。



- (左) 図1 1934年4月 オリオンコール事務所前（東京市淀橋区柏木4 888）で撮影されたと見られる写真。写っているのはメンバーの一人である高見三夫。
- (中央) 図2 第1回合唱音楽祭パンフレットの表紙 全日本合唱センター資料室所蔵。
- (右) 図3 1931年11月29日、第5回合唱大音楽祭にて優勝した芙蓉会合唱団の写真。後方にオリオンコールのメンバーとなる高見と大塚も写っている。右下には、コンクールで指揮者を勤めた関口のものと考えられるサインが書かれている。

表1 オリオンコールが出場した、合唱コンクールでの順位と曲目

昭和	大会次	順位	曲目
3年	2回	番外	「幽棲」「嵐の袂い」
4年	3回	4位	「靈泉」「騎士の別れ」
5年	4回	2位	「夜の曲」「アンニールーリー」
6年	5回	2位	「科の木」「Old Blackjoe」
7年	6回	1位	「野路の歌」「村の踊り」
8年	7回	特別出演	「ハツシュ・ヨー・ホネー・ハツシユ」

吉田が結成のきっかけを「オリオンコールもコンクールで生まれた楽壇（原文ママ）である」ⁱⁱⁱと述べているように、オリオンコールは昭和2年に始まった合唱大音楽祭（コンクール）に出場するために結成された合唱団である可能性がある。オリオンコールは昭和3年の第2回から参加し、翌年には4位を獲得した。その後第4回と5回では2位になり、昭和7年の第6回競演合唱祭（合唱大音楽祭）で1位を獲得した。翌年の第7回には前年優勝者として特別出演を果たす。これがオリオンコールの最後のコンクール出場となる。

オリオンコールはコンクールで1位を獲得する前年、昭和6年にレコードデビューを果たした。そのレコードは徳山蓮と共に歌った「ころがせころがせビール樽」（ビクター）である。その後もオリオンコールは、複数のレコード会社で数多くの吹き込みをしており、曲目がわかっているものは18枚にのぼる。

表2 オリオンコールが吹き込みを行ったレコード^{iv}

発売年	タイトル	演奏者	発売元
1931	「ころがせころがせビール樽」	オリオンコール 徳山連	ビクター
1932	「肉弾三勇士」	オリオンコール	ビクター
1932	「この世の天国」	オリオンコール 奥田良三	ポリドール
1932	「兵士の合唱」	オリオンコール	ビクター
1932	「山田一等兵」	オリオンコール ビクター管弦楽団	ビクター
1932	「農村婦人の唱」	オリオンコール女性合唱団	コロンビア
1933	「日本青年の歌」	オリオンコール	キング
1933	「駒の蹄」	オリオンコール	キング
1934	「ばあやのお家」	オリオンコール	ビクター
1934	「権兵衛が種まく」	オリオンコール	ビクター
1934	「祭りばやし」	オリオンコール ビクター管弦楽団	ビクター
1934	「北進日本の歌」	オリオンコール	コロンビア
1934	「旗と共に」	オリオンコール 奥田良三	ポリドール
1935	「般若心経 歌劇『夢』」	オリオンコール	ビクター
1935	「御会式行進曲」	オリオンコール	ビクター
1936	「ヴォルガの舟歌」	オリオンコール	ビクター
1936	「なつかしの君」	オリオンコール	ビクター
1939	「蹴球行進曲」	オリオンコール 鳴海匡純	不明

彼らが吹き込んだレコードの多くが活動初期の昭和6年から9年にかけてのものである。この中には「肉弾三勇士」のような国民歌^vも含まれている。昭和9年（1934年）に発売された「北進日本の歌」は樺太・千島列島を題材にして作られた映画「北進日本」の主題歌、また同年の「旗と共に」はナチスの宣伝映画として作られた映画「ヒットラー青年」の日本版主題歌である。



(左) 図4 1935年4月7日 コロンビヤスタジオにて



(右) 図5 1934年4月22日 日本青年館にて 男声合唱団オリオンコール

表3には昭和6年から昭和9年にかけて出演した演奏会や公演の情報をまとめた。舞台は合唱にとどまらない。たとえば昭和8年に行われた「白弦社公演会 歌劇 夢」は、堤徳三の主宰する白弦社が行った歌劇で、「藤山一郎を始め新進化歌手」^{vi}による初演であったが、そこでオリオンコールは合唱を担当している。また、同年の昭和8年には精神分析學研究所主催の、「フロイ

表3 昭和6年から昭和9年にかけての演奏会活動[※]

昭和	日付	演奏会	曲目
6	11月21日	「三合唱団の合同演奏」	「アヴェ・マリア」「勝利の行進曲」「他郷の月」「アロハオエ」「柳の木」「ふるさと」「アンニールーリー」
7	11月27日	「音楽かくせい会秋季演奏会」	「明日まで」「村の踊り」
8	2月12日	「春の音楽祭」	「ヴォルガの舟唄」
8	4月21日	「フロイド 祝祭劇（エディポス王の悲劇）」	「エディポス王の悲劇」
8	4月22日	「珠寶会」	「アヴェマリア」
8	5月4日	「自弦社会公演会 歌劇 夢」	「水夫の別れ」「婆やのお家」「老ひたる黒人ジョー」
8	6月10日	「東京慈恵会医科大学第14回定期演奏会」	「水夫の別れ」「夏の夜の星影」「アンニー・ローリー」「小夜曲」「自由芸術」
8	6月21日	「日獨交響合唱演奏会」	「我が里」「男性合唱とピアノの鳥の小競演奏」
8	7月6日	「米倉俊英氏音楽告別式」	曲目不明
9	7月13日	「サルヴァドール日満交驛の夕」	「アメリカ南部の歌」「エイウツフネム」
9	10月25日	「栗原忠良 岡崎二郎 歌の夜」	「美しの恋人」「恋と歡樂」「海越えて渡る風」「モンテカルロの歌」「マドロスの恋」「黒い瞳」「チエリオ」
9	9月19日	「文芸家慰霊祭」	「青葉茂る」その他
9	11月10日	「J.C.Sの集ひ」	「歌あればこそ世はたのし」「海越えて渡る風」「マドロスの愁」
9	11月12日	「第2回音楽週間」	「デイエーレゴッテス」「霜の旦」「菊の盃」「ハレルヤ大合唱」



(左) 図6 「フロイド祝祭劇（エディポス王の悲劇）」出演時の写真 1934年4月21日



(右) 図7 サルヴァドール日満交驛の夕 1934年7月13日

ド祝祭劇（エディポス王の悲劇）」にも参加している。

昭和8年6月21日に関東男声合唱連盟主催で行われた、「日獨交歓合唱演奏会」では、主に日本人作曲家とドイツ人作曲家の歌を歌っている。またこの演奏会ではドイツ代理大使の挨拶もあり、両国の国家を歌うなど、当時のドイツと日本の親密さがうかがえる。

昭和9年7月13日にジャパン・タイムス社の主催で行われた「サルヴァドル日満交驛の夕」では、満州国公使やサルヴァドル総領事、またベネズエラ名誉領事が開会に挨拶を行った。この演奏会では、ジャズなどが歌われた。

オリオンコールの活動は、演奏会だけではなく歌劇への参加など多岐にわたった。こうした中で、とりわけ注目すべきなのが外国との関わりがある演奏会である。のちに日本と同盟を組むことになるドイツや、傀儡国家として建設したばかりの満州の関係者を招いて行われた演奏会に参加したことは、その当時の時局との関わりであろう。

3. 昭和10年から昭和11年まで

ここでは、合唱コンクールでのグランプリ獲得を期に一気に知名度を上げたオリオンコールの最盛期の活動を記述する。彼らは、昭和10年から昭和11年までの2年間にさまざまな活動を行った。設立以来初となる主催の研究発表会（演奏会）や、女声コーラスグループとの混声合唱団である「ルナ・オリオンコール」としての活動など、この時期はオリオンコールにとって、その活動が最も充実した時期だったと言える。

一方で、オリオンコールの最盛期は2年と短かった。その大きな理由は、盧溝橋事件を端緒とする日中戦争である。日本が戦争を始める昭和12年（1937）から、国内では、メディアを通じた情報統制が強化された。言うまでもなく情報統制はそれ以前から行われており、音楽もまた満州事変（1931）を機にプロパガンダに大いに利用されてきた。昭和9年（1934）には、出版法改正や日本放送協会改組による、ラジオ放送への国家管理強化が行われた。

しかし、こうした動きは、音楽界全体の組織や体制そのものの抜本的な変革に発展していくものではなかったと戸ノ下は指摘している（戸ノ下2008：54）。オリオンコールもまた日中戦争が起きるまでは、レコードで国民歌を歌うことはあっても、その他の場所では情報統制に縛られることなく自由に活動を行っていた。



（左）図8 昭和10年5月30日の研究発表会プログラム

（下）図9 昭和10年5月30日の研究発表会チケット



オリオンコールは昭和10年、結成7年目にして初の主催演奏会を日本青年館にて行った。図8のプログラムには、オリオンコールの紹介やメンバー個人の詳細、また研究生の募集などさまざまな情報が記載されている。この情報をもとに作成したメンバーの一覧が表4である。

結成初期と比べると、この時期には音楽の専門教育を受けたメンバーが増えていることが分かるだろう。なかには横田や鳴海のようにコンクールで入選した経験を持つ者もいる。またメンバーの中には大塚楠男や鳴海信輔、高見三夫のように他の団体やレコードでの活動をしていた者もいる。高見三夫は、藤山一郎、浅野常七とともに昭和11年にピクチャーにおいて「箱根の山」を、鳴海信輔は昭和17年に同じくピクチャーにて、「空の神兵」を録音している。

当時のオリオンコールは、団長である吉田の自宅に機材や家具を設置し、専用のスタジオとし

表4 オリオンコールの昭和10年5月時点でのメンバー表

名前	パート・役職	主な経歴
吉田 永靖	代表者、テノール	医学士 耳鼻科咽喉科医
藤井 眞治	支配人	文学士
大塚 楠男	セロ、編曲、テノール	東京高等音楽学院卒 その他に永井、鷗塚とシリウストリオを結成
河合 武雄	ピアノ、バス	武蔵野音楽学校卒
蒲地 幸鎮	テノール	東京高等音楽学院卒 時事第一回コンクール入選 大阪第一回コンクール入選
横田 孝	バス、ピアノ	東京高等音楽学院卒 第三回コンクール入選
高見 三夫	バス	東京高等音楽学院卒 日本健康婦人会音楽講師
鳴海 信輔	テノール	東京高等音楽学院卒 第三回コンクール入選
笹谷靖一郎	テノール	法学士
佐々木榮治	編曲	東京高等音楽学院卒 コスモコール主宰
久富 吉晴	テノール	東京高等音楽学院卒
大江 知郷	バリトン	
末綱 卓市	バリトン	
原田 英雄	バリトン	



(左) 図10 1935年9月23日、青年館控室にて。前列右から山田耕作とアウグスト・ユンケル。前列左端が団長の吉田永靖



(右) 図11 ルナ・オリオンコール、日本青年館前にて(1935年9月23日)

て使用していた。コンクールで入賞した実績のある音楽学校の学生を集め、著名な音楽家に指導されていたオリオンコールは、その当時の他のアマチュア合唱団の中ではトップレベルにあったことは間違いないだろう。オリオンコールはより専門的な音楽集団へと変貌を遂げていたのである。

昭和10年から11年にかけての活動の特色として、女声合唱団「ルナ・コーラ」^{vii}と共同で混声合唱団「ルナ・オリオンコール」を結成していたことが挙げられる。ルナ・オリオンコールの「第一回定期公演会（プラムスの夕）」は昭和10年9月23日に日本青年館で開催された。だが、その活動は短期間のうちに幕を閉じた。昭和11年（1936年）3月の『音楽新潮』^{ix}によると同年2月15日に、女性側の意見が受け入れられないとし、女性メンバーのうち5人が脱退している。この件について吉田はこう主張している。

全く困りますよ、自分としては随分全力を上げて仕事をし、団体の勉強の機会を少しでも多くしやうと努力して来ています。女性部を増設した昨年九月以来仕事は随分やっています。勉強とか研究とか云っても、勉強や研究ばかりでやっていけるものぢやありません。我々のやり方を封建的だと云はれるが、女の方も実際、實務的でなくてそれでいて我儘で困ります^x。

吉田がいう「努力」には多分に資金面での苦勞があったと見られる。高見氏は「オリオンコールはアマチュアの合唱団だったから、給料なんて言うものは、一度ももらったことがなかった。レコードやラジオへの出演の謝礼は、おそらく活動資金になっていたんじゃないかと思う。」と述べている。

この脱退事件の後、ルナ・オリオンコールは直ちに解散したわけではない。ルナ・オリオンコールは男声部12人と女声部12人で構成されていたため、脱退した女性メンバーの補充をすれば活動に支障はなかった。そのため、メンバーが脱退した2月15日以降、記録に残っている限り3回の演奏会に参加している。

昭和10年から翌年にかけてのオリオンコールの演奏会活動を表5にまとめた。全15回の演奏会のうち5回がルナ・オリオンコールとしての活動も含む、主催の演奏会である。ここで注目したのは、彼らの主催演奏会以外に、他団体の企画演奏会にゲストとして招かれたものが複数ある点である。たとえば昭和10年11月22日には、東京音楽学校にて行われた「第七回佛教聖教発表会」（文部省宗教局内佛教音楽協会主催）に参加した。昭和11年5月28日に日比谷公会堂で行われたオリンピック蹴球選手送別会は、ベルリンオリンピックに出場するために渡欧するサッカー選手の送別演奏会である。主催はオリンピック蹴球選手後援会で、これにはルナ・オリオンコールとして参加している。

昭和11年10月26日日比谷公会堂で行われた「日伊公驩演奏会 ヴェルディの夕」は、主催が成城学園、賛助ルナ・オリオンコール、後援「伊太利大使閣下」で開催された。この演奏会が行われた翌年の昭和12年（1937）日本はイタリアとドイツと共に日独伊防共協定を結び、戦争への道へと突き進んでいくことになる。

表5 オリオンコールが昭和10年から11年にかけて参加した演奏会の一覧

昭和	日付	演奏会名	曲目
10	5月31日	「オリオンコール研究発表会」	
10	9月23日	「ルナ・オリオンコール 第1回定期演奏会」	「大学祝典序曲」「哀悼の歌」ほか
10	10月28日	「ルナ・オリオンの夕」	「Der Lindenbaum」「Die nacht」ほか
10	11月13日	「千人の大合唱」	「アヴェ・マリア」「白銀の太刀」「輝く朝」「皇國日本」「讃へよ皇國」
10	11月14日	「北原白秋 生誕50年記念 謝恩音楽界」	「輝く朝」「かぐや姫」
10	11月22日	「佛教聖教第7回発表会」	「四季の法悦」「世の中」「香」「衆会」
10	11月28日	「ルナ・オリオンコール第2回定期演奏会」	「秋の宴」「巴里佛國寺に捧ぐる曲」ほか
10	12月23日	皇太子（当時）誕生日奉祝放送（銀座交詢社講堂からの中継放送）	ベートーベン交響曲第9番（第4楽章）（ルナ・オリオンコールとしての出演）
11	3月6日	「大合唱の夕べ」	「ローレライ」「おう雲者」「鶯」「踊り」
11	3月8日	「四大合唱団がフォーレ祭で合同演奏会」	ビクターの新譜「レクイエム」
11	3月30日	「ルナ・オリオンの夕」	
11	5月11日	「大音楽祭」	「荒城の月」「囚人」「蒼い月」「小川のほとり」「ヴォルガの舟唄」
11	5月28日	「オリンピック蹴球選手送別会」	「交響曲第9」
11	7月1日	「日本歯科医専 創立周30年演奏会」	曲目不明
11	9月28日	「日本ビクター演奏大会」	「国境千里」「ヴォルガの舟唄」
11	10月26日	「日伊交驩演奏会」	「詳細別紙」



(左) 図12 オリピック蹴球選手送別音楽会のプログラム表紙（昭和11年5月28日）

(右) 図13 日時、場所不明の写真であるがオリオンコールの12人が舞台の上にいる。背後に見える国旗の配置から日独伊三国同盟と関連する舞台で撮影されたと推測される。

4．昭和12年から昭和17年まで

昭和12年以降のオリオンコールは、戦争の影響を強く受けることになった。彼らは国策宣伝のための楽曲を多く歌うようになり、メンバーも次々と徴兵された。

オリオンコールは、昭和12年4月19日からJOAK（現NHK）で放送されていたラジオ番組「国民歌謡」に出演していた。オリオンコールもこの番組で、国民歌と見られる楽曲を歌うことが多くなった。

表6 オリオンコールが「国民歌謡」で歌った演目

昭和	日付	演目
12年	4月19日	「総選挙の歌」
12年	6月28日	「新鉄道唱歌」
12年	9月12日	「防護国国家」
12年	9月12日	「空軍の花」
12年	12月6日	「国民精神の歌」
13年	5月20日	「徐州陥落」
14年	8月28日	「大槻一等水兵」
14年	9月1日	「興亜奉公の歌」

表7 昭和12年から昭和17年までの間にオリオンコールが参加した演奏会

昭和	日付	演奏会名	備考
12	5月18日	「AT THE EMBASSY OF THE U.S.S.P」	不明
12	7月1日	「金曜会 研究劇団 第一回(喘ぐ民俗)」	劇に参加
14	4月16日	「日比谷厚生演奏会」	不明
14	5月14日	「日比谷厚生演奏会」	不明
16	10月10日	「オリオンコール第1回男性発表会」	主催の演奏会
16	12月14日	「オリオンコール第2回男声発表会」	主催の演奏会
17	2月30日	「オリオンコール邦人作品の夕」	主催の演奏会
17	11月29日	慶応マンドリン倶楽部 第59回演奏会	合唱を担当する

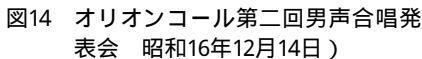
活動後期であるこの時期は、それ以前と比べて、演奏会への参加があまり見られなくなった。全盛期の昭和10年と11年の2年間には計16回の演奏会に参加していたにも関わらず、この5年間はわずか7回にとどまっている。

また昭和14年に団長が吉田から大塚に替わる^{xi}のを境に活動回数はさらに激減した。時期を同じくして、ラジオ番組「国民歌謡」への出演も途絶えた。

メンバーの一人であった高見はこう語っている。「オリオンコールは、男声合唱団だったため、メンバーのほとんどは日中戦争のために、徴兵で戦場へと駆り出されていった。自分が戦場から帰った時、メンバーは誰もいなくなっていたし、消息もわからない。オリオンコールはその時に解散したのではないだろうか。」

高見三夫は昭和12年に召集され、「軸重兵第十八大隊」に入管、昭和16年に召集解除された。そして昭和17年に再び中国へ渡り、「天津市立第一女子中学校教諭」を務め、天津で終戦を迎えた。終戦後に帰国した時には、オリオンコールはすでに解散していたのである。

オリオンコールとしての活動は昭和17年を最後に見られなくなる。だがメンバーの中には戦後



5. おわりに

本稿では収集した資料の全てを掲載することは不可能であるが、その活動の概略はカバーできたものと考えられる。彼らの活動が戦後の日本の合唱界の発展の伏流であったことは間違いなく、本稿がオリオンコールをはじめとした個々の団体の活動を、より詳細に進めていく端緒となれば幸いである。

戸ノ下達也 2008 『音楽を動員せよ』 青弓社
 戸ノ下達也 2010 『「国民歌」を唱和した時代』 吉川弘文館
 戸ノ下達也・横山琢哉 2011 『日本の合唱』 青弓社
 堀内敬三 1948 『音楽五十年史』 鱗書房
 村越光男・佐藤孝夫 2006 『昭和歌謡全曲名(戦前・戦中編)』 つげ書房新社
 山口篤子 2005 「国民音楽協会と合唱音楽祭の初期事情 - 小松耕輔の民衆音楽観を中心に」 『阪大音楽学報』
 3 : 1 16
 山口篤子 2009 「明治・大正期の合唱受容 - 合唱観の変遷と活動の実際」 『阪大音楽学報』 7 : 19 34
 吉田永靖 1943 「合唱コンクールの概観」 『音楽の友』 1月号、pp.77 82

本研究の遂行にあたり、全日本合唱センター資料室、国立音楽大学附属図書館の松浦潤子氏と染谷周子氏、洋楽文化史研究会の戸ノ下達也氏、そしてオリオンコールのメンバーであった高見三夫氏から多くの御教示をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

- 13

^{viii} 「ルナ・コーラとは、女声合唱の研究団体。オリオンコールの兄妹団体にして、合同演奏の場合はルナ・オリオンコールと稱す。メンバーは14人名。代表者横田都馬子。」『音楽年鑑』昭和13年、p. 340

^{ix} 『音楽新潮』1936年3月号の記事「ルナ・オリオンコールが決裂」より、脱退したメンバーは山野美和子、狩野愛子、鎌田秋子、亀井静、稲田美代子の5人である。

^x 『音楽新聞』1936年3月号には「声明書乱れ飛ぶ楽壇 演奏団体の分裂相つく」との特集記事があり、その中に「男性横暴を叫ぶルナコーラ 夫人は非実際的でとオリオン」との見出しがある。引用の吉田の発言はこの記事に見られるものである。

^{xi} 『音楽新聞』昭和14年8月下旬号、p. 1